

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	恒藤恭と芥川龍之介：蘆花「謀叛論」を介在として
Author	関口, 安義
Citation	大阪市立大学史紀要. 3巻, p.40-55.
Issue Date	2010-10
ISSN	1884-3522
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学史資料室
Description	
DOI	10.24544/ocu.20171208-078

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

《シンポジウム記録：論文》

恒藤恭と芥川龍之介 —蘆花「謀叛論」を介在として—

関 口 安 義

はじめに

1989年のベルリンの壁の開放、翌年の東西ドイツ統一、さらには1991年のソ連邦の解体による冷戦の終了は、資本主義と共産主義というイデオロギーの対立の終結をも意味した。が、民族・人種・宗教の対立は表面化し、南北差・国民格差の問題は、より先鋭化している。こうしたポスト冷戦期の状況下、芥川龍之介をはじめとする日本文学研究は、新たな様相を帯びるようになる。わたしはそれをアメリカ・ニュージーランド・フランス、そして中国・韓国の大に行き、当地の大学人と交流し、身につまされる体験をした。専門とする日本近代文学、特に芥川龍之介研究においての国際体験は、これまでの日本の研究がいかに小さく、貧しいものであったかを知らせてくれるものでもあった。その一端は、先に刊行した『世界文学としての芥川龍之介』⁽¹⁾の「序章」に記したところだ。

冷戦後の世界情勢の変化は、東洋の一作家芥川龍之介のテクストに、世界文学としての位置を与えることになる。その象徴的出来事が、イギリスの大手出版社ペンギン社刊行のペンギン・クラシックス・シリーズへの芥川小説集の登場だ。訳者は村上春樹の英訳者として知られるジェイ・ルービンである。芥川没後80年を前にして『「羅生門」ほか17編』(Rashōmon and Seventeen Other Stories)と題された芥川小説の新訳が刊行⁽²⁾され、「古典（classic）」として英語圏の読者に提供された意義は、いくら強調しても仕過ぎることのないほどの事件であった。

ジェイ・ルービンの英訳『「羅生門」ほか17編』は、一年後『芥川龍之介短篇集』⁽³⁾として日本に逆輸入される。このことは芥川が外国で再発見されたことをいみじくも証明することもなった。つまり、芥川テクストには、「どの国の人間でも共有できる体験を通じて読書の喜びを得る」（J・ルービン）ことのできる豊かな「資質」があり、それが世界文学入りさせているというのである。2005年3月には中国で『芥川龍之介全集』全5巻が刊行⁽⁴⁾され、2009年からは韓国でも芥川の全集の刊行⁽⁵⁾がはじまっている。

(1) 関口安義『世界文学としての芥川龍之介』新日本出版社、2007年6月15日

(2) *Rashōmon and Seventeen Other Stories* ペンギン社、イギリス版2006年3月、アメリカ版2006年9月

(3) ジェイ・ルービン・畔柳和代訳『芥川龍之介短篇集』新潮社、2007年6月30日

(4) 高慧勤・魏大海編『芥川龍之介全集』全五巻、山東文芸出版社、2005年3月、日付なし

(5) 曹紗玉編『芥川龍之介全集』第一巻、J and C 出版社、2009年7月24日

このような芥川龍之介の文学に、若き日の親友恒藤恭が深く関わっていたことも、次第に明らかになった。恒藤恭、旧姓井川恭は芥川龍之介の文学的出発に大きな影響を与えたばかりか、その歩みには共通項が多くある。それを箇条書きにするなら、①同時代青年共通の謀叛の精神の体現者であったこと ②共に創作に励んだこと、——井川恭は一高時代はセミプロの作家であった。彼は授業料はもとより、生活費まで鈴かけ次郎その他の仮名で書いた少年小説の原稿料でまかなっていた ③外国生活（芥川・中国、恒藤・ヨーロッパ）から多くのことを学んだこと ④共にキリスト教や社会主义思想に敏感だったことなどである。二人の存在を短いことばで表現するなら、まさに〈時代と対峙した二つの知性〉ということになる。

1. 一高時代の恒藤恭と芥川龍之介

恒藤恭は1888（明治21）年12月3日、島根県松江市に、芥川龍之介は1892（明治25）年3月1日、東京に生まれた。二人の年齢差は3年3ヶ月で、学年差は4年ということになる。

二人が生きた時代は、天皇制国家としての近代日本が、急速に形を成して行く時代であった。恒藤恭の生まれた翌年の1889（明治22）年には、大日本帝国憲法が、続いて1890（明治23）年には教育勅語が発布される。天皇絶対視と国体精神が強調され、国民は天皇の臣民と位置づけられ、自由が大幅に制限された時代であった。

さて、恒藤恭は島根県の県庁所在地松江に誕生した。生家は井川家である。後年恒藤姓を名乗るのは、恒藤規隆の長女まさ（雅、雅子とも記した）と結婚し、恒藤家を継いだからである。恒藤恭の生家、井川家は津和野の亀井藩の士族の出である。生家の読みは、イガワと濁って読むとは、恒藤恭の次男で同志社大学に勤務された恒藤武二氏の証言（直話）だが、恭、本人はイカワと清音で読むのを好んだようである。芥川の井川恭宛書簡と対になると思われる恭の書簡が、大阪市立大学の恒藤記念室に保存されている。その中の一通、1912（明治45）年7月14日付の英文書簡の最後に恭は、K Ikawaと署名している。彼はイカワという清音を好んだのであろう。ことばへの感性の問題だ。

さて、井川恭と芥川龍之介が出会うのは、1910（明治43）年9月、旧制の第一高等学校（略称一高）第一部乙類に入学した時にはじまる。第一部乙類というのは、文科の英文科である。井川恭は島根県立第一中学校を卒業するが、消化不良の病で約三年間の静養生活を送った後、上京し、都新聞の見習記者をしている時に一高入学を決意し、試験を受けて合格する。井川には「二週間の勉強で一高の入学試験を通過した僕の経験」⁽⁶⁾という文章がある。戯作調の文体で、合格までの体験を綴ったものである。一方、芥川龍之介は東京府立第三中学校を卒業、その年無試験検定（推薦）で一高に入学する。1910年という年に、二人が一高に入らなければ、〈時代と対峙した二つの知性〉は、巡り合うことはなかったであろう。

(6) 井川恭「二週間の勉強で一高の入学試験を通過した僕の経験」『中学世界』臨時増刊、1910年9月
16日

この年の一高第一部乙類入学者には、他に無試験検定入学で長崎太郎・佐野文夫・久米正雄らが、試験入学に菊池寛・石田幹之助・松岡譲・藤岡蔵六らが、補欠入学で成瀬正一らが、さらに前年の入学ながら岩元禎のドイツ語の試験に失敗した山本有三・土屋文明などがいた。皆、後年筆で名を成した人々である。井川恭はこれらの仲間のうちでは、芥川龍之介のほか、長崎太郎と藤岡蔵六と親しい関係を結ぶのであった。

長崎太郎は高知県安芸郡安芸町（現、安芸市）の生まれ。高知県立第三中学校を卒業、一高には芥川などを押さえ、無試験検定トップで合格する。井川恭とは一高の自治寮の中寮や北寮で親しくなり、三年になると寮を出て、本郷弥生町の下宿で生活を共にするようになる。一高最後の学期には、二人は新装成った小石川上富坂の日独学館に越し、一高に通った。また、二人は共に京都帝国大学法科大学に進学し、京都近衛町の京大寄宿舎でもいっしょに暮らす。井川の在外研究時代の1924（大正14）年には、二人してイタリア美術行脚に出かけている。長崎太郎は後年京都市立美術大学（現、京都市立芸術大学）の初代学長を勤め、多くのすぐれた芸術家を育てた。

藤岡蔵六は愛媛県北宇和郡岩淵村（現、津島町）の生まれ。愛媛県立宇和島中学校を経ての一高入学である。藤岡は入学早々芥川と話を交わし、当時新宿にあった芥川の家に招かれている。藤岡の回想記『父と子』（私家版）に、そのことが書かれている。『芥川龍之介全集』には、芥川の藤岡宛書簡が十四通収められているが、どれもが若き日の一高・東大時代のものである。それらを読むと、芥川がいかにこの人物を買っていたかがわかる。藤岡は井川恭とも親しく、休日にはいっしょに東京中を歩き回っては話をし、一高最後の学期には日独学館の同室で過ごしている。いっしょに越した長崎太郎は、弟の次郎と同室であった。

いわなかし
哲学者の出隆は、「藤岡事件とその後」（『出隆自伝』収録）という文章で、一高時代の芥川・井川・藤岡の三人を「仲のいい三羽鳥」と評しているほどである。この「藤岡事件とその後」は、不遇だった藤岡蔵六の学者生活の出発を語った実に貴重な文献だ。わたしは『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』⁽⁷⁾という本を出したが、藤岡の生涯は氣の毒なほど恵まれなかった。そういう存在の人間を、芥川と井川恭は深く理解したのである。藤岡蔵六はドイツ留学後、東北帝國大学に就職が内定していながら、不運にもはじかれ、新設の旧制甲南高等学校（現、甲南大学）に就職する。そして健康を害し、その才を十分生かし得なかった。彼は新カント派の日本への紹介者でもあった。

井川恭は長崎太郎や藤岡蔵六とも親しく交わるが、互いに惹かれ、もっとも深く交際したのは、芥川龍之介であった。一年生の二学期あたりから交際が始まり、芥川が寮に入り、井川と同室になると、二人の仲は急接近する。

(7) 関口安義『悲運の哲学者 評伝藤岡蔵六』イーディー・アイ、2004年7月30日

2. 井川恭と芥川龍之介の交流

一高生は二人でペアを組むことが多かったようだ。久米正雄と松岡譲、菊池寛と佐野文夫の仲がよく知られている。が、久米正雄と松岡譲の仲は、漱石令嬢筆子をめぐる騒動で破れ、菊池寛と佐野文夫の仲は、佐野の盜癖が原因となった菊池の一高退学事件で終わる。それらに対して井川恭と芥川龍之介の仲は、井川と長崎太郎との場合同様、終生のものとなる。これは井川恭が友情に厚かったこと、他者を思いやる精神に富んでいたからなのである。後年恒藤恭は「青年芥川の面影」⁽⁸⁾で、二人の交際の様子を語っている。そこには「入学直後の第一学年のあいだは特に親しく接触するということもなかったけれど、次の学期となって、(どのようなきっかけからであったかは記憶していないが) 私たちは急速に親しい間柄となった。午前の授業と午後の授業のあいだの昼休みの時間の時などに、よく私たちは運動場のふちにある木立の下をあるいはたり、立ち止まつたりして、話しつづけた」とある。

一方、芥川龍之介の後年の人物記「氣鋭の人新進の人 恒藤恭」⁽⁹⁾には、「一高にゐた時分は、飯を食ふにも、散歩をするにも、のべつ幕なしに議論をしたり。しかも議論の問題となるものは純粹思惟とか、西田幾多郎とか、自由意志とか、ベルグソンとか、むづかしい事ばかりに限りしを記憶す」とある。このエッセイでは、一高時代の寮生活にふれ、「恒藤は朝六時頃起き、^{ヨリ}午の休みには就寝をし、夜は十一時の消燈前に、ちゃんと歯を磨いた後、床にはひるを常としたり。その生活の規則的な事、エマヌエル・カントの再来か時計の振子かと思ふ程なりき」と恒藤恭に関して書いている。一高時代の井川恭を、ユーモアを交え、よく捉えている。が、芥川の文章は決して誇張ではなく、井川の学寮生活を的確にとらえ、表現しているのである。井川の規則正しい寮生活には、長い闘病生活の教訓が生きていた。規則正しい生活、それによって得られる健康があつてはじめて学問や創作ができるのだという考えは、井川恭、後年の法哲学者恒藤恭の長い学究生活の信条であった。彼の生涯を通しての龐大な量の著作と幅広い社会的活動の基盤はここにあった。

一高時代の井川恭と芥川龍之介の交流で落とすことの出来ないのは、井川が芥川に英文の聖書 *THE NEW TESTAMENT* を贈っていることだ。井川は中学時代義兄佐藤運平の死を経験し、日常性の世界を超えるものの存在を知り、英文の新約聖書を購入、熟読するようになる。そして松江の日本聖公会松江基督教会牧師で島根県立一中の英語講師をしていたオリバー・ナイトが自宅で開いていた聖書研究会に出席、熱心に聖書研究に励んだ。ナイトの聖書研究会に出席したのは、英語を学ぶのが目的だったと後年彼は語るが、義兄の死という事件がなくば、ナイトのところにはいかなかつたろう。中学時代の聖書受容は、彼の生涯の精神的バックボーンとなる。井川恭が義兄の死に際して、聖書に接近したのは、家庭的な要因もあった。姉シゲの夫

(8) 恒藤恭「青年芥川の面影」『近代文学鑑賞講座 11 芥川龍之介』角川書店、1958年6月5日

(9) 芥川龍之介「氣鋭の人新進の人 恒藤恭」『改造』1922年10月1日、のち「恒藤恭氏」と改題『百年』新潮社、1924年9月17日収録

佐藤運平の不幸な死は、家族をキリスト教に結びつけていたのである。ちなみにわたしが日本聖公会松江基督教会の『施洗信徒名簿』を調査したところ、井川家では母ミヨをはじめ姉のシゲやセイ、それに妹のサダなど、家族の多くが洗礼を受けたクリスチャンであったことが判明した。

井川恭は洗礼こそ受けなかつたが、キリスト教には中学時代から並々ならぬ関心を懷いていたことになる。一高で親友となった芥川龍之介に、中学時代に読んだと同じ英文聖書をプレゼントするのはきわめて自然であった。また、そこには時代的な一つの流れ、——当時の青年にとって聖書が新鮮な教養書だったということもむろんある。井川恭の聖書受容は、恒藤恭となった後年の彼の活動にも反映する。時代の嵐の中で、1933（昭和8）年の京大事件においては、職を賭けて文部省と渡り合うという気骨ある態度を示し、第二次世界大戦後も平和憲法擁護、そして世界平和への提言で活躍した精神的バックボーンは、社会主义とキリスト教の受容によるヒューマニズムの精神が与っていたのである。なお、近年の『岩波キリスト教辞典』⁽¹⁰⁾の項目には、芥川龍之介はむろんのこと、恒藤恭の項目も見出せる。

芥川が聖書やキリスト教に近づいたのは、一高時代の井川恭の影響が大きかった。芥川は井川恭から貰った英文の新約聖書——THE NEW TESTAMENT を大切にし、生涯大事に保存した。それは現在、東京駒場にある日本近代文学館の芥川龍之介文庫で見ることができる。芥川は赤インクでアンダーラインを引きつつ熱心に読んだ形跡を残している。旧約聖書を含めての聖書の熟読は、この三年後のことだが、以後聖書は常に芥川の手許に置かれ、読まれることになる。

3. 蘆花の「謀叛論」

さて、本論で扱うメインテーマは、蘆花の「謀叛論」演説と、二人に及ぼした影響である。つまり〈時代と対峙した二つの知性〉が、「謀叛論」を介在としていかに羽ばたいたかだ。2010年は、大逆事件100年の記念すべき年である。当然、その判決を批判した徳富蘆花の「謀叛論」も省みられるはずである。

余談になるが、大逆事件の「大逆」はどう読むか。広辞苑には「タイギャク」「ダイギャク」の二つの読みが出ている。そして現在、高校の日本史の時間などでは、「タイギャク事件」と発音されるのが一般的だ。ただ演劇などでとりあげられる時は、「ダイギャク事件」と発音されている例がしばしばである。これは日本語の語感ともかかわる。タイギャクよりダイギャクと一語の冒頭から濁音で発せられる方が重々しい感じがする。これは近代日本の歴史の中でも大事件なので、私見を言うなら、演劇人のようにダイギャク事件と呼ぶ方が、ふさわしいよう思う。

さて、大逆事件というのは、近代日本に起こった一大事件である。かいづまんで言うなら、恒藤恭や芥川龍之介らが第一高等学校に入学した1910（明治43）年5月に起こった社会主义

(10) 大貫隆他編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年6月10日

者や無政府主義者に対する弾圧事件であった。爆発物取締罰則違反という容疑で何人もの青年が信州松本で逮捕され、それは拡大し、社会主義者の管野スガや幸徳秋水の逮捕にまで至る。罪名も「某重大事件」「不軌の大陰謀」ということに変わり、非公開の形式だけの裁判を経て、翌年1月、死刑24名、翌日には12名だけが「天皇陛下から特赦」で無期懲役になる。そして1週間後にはあわただしく死刑が行われたという事件である。社会に強い関心をもっていた蘆花にとって、これは見逃すことのできないことだった。もともと蘆花には、物事の真実を見極めるジャーナリスト魂が濃厚に存在した。蘆花は1910(明治43)年6月5日の『東京朝日新聞』その他で事件を知り、その推移を見守ってたが、事件は急転直下、翌年1月24日に死刑は執行された。

蘆花がそのやり切れない思いを「謀叛論」の題名で、一高の弁論部主催の講演会で語るのは、1911(明治44)年2月1日のことであった。いわゆる「蘆花の演説」である。それは当時在校していた一高生に、大きな衝撃を与えた。蘆花は事件に際して時の政府の取ったやり方を、強く批判する。蘆花は「社会主義が何が恐い?」「世界の何処にでもある。然るに狭量にして神經質な政府は」と言い、「社会主義者が日露戦争に非戦論を唱ふると俄に圧迫を強くし」、官権と社会主義者は到頭犬猿の間となつて了つたと叫ぶ。蘆花の政府攻撃の舌鋒は鋭く、「幸徳等に対する政府の遣口は、最初から蛇の蛙を狙ふ様で、随分陰険冷酷を極めたものである」とまで言い、政府責任論まで進む。さらに演説は高調し、「諸君、謀叛を恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である」とか、「諸君、我々は生きねばならぬ、生きるために常に謀叛しなければならぬ。自己に対して、また周囲に対して」とまで言う。最後は「要するに人格の問題である。諸君、我々は人格を研ぐことを怠つてはならぬ」で結ばれる。以上は演説草稿から当日蘆花が話したであろうことをまとめたわけだが、近年の研究では蘆花は草稿にかなり近いことを語ったのは、間違いないとされるようになる。それはこの日、蘆花の演説を聴き、記録した一群の学生が存在したからである。

4. 「謀叛論」の記録者たち

この日蘆花の演説を聴き、記録に残した人はかなりいた。わたしの長年の調査で網にかかった記録者たちを、当時一高に在籍した上級生と、1910(明治43)年入学のフレッシュマンとに分けてあげてみよう。

まず、世田谷の柏谷で美的百姓の生活をしていた蘆花を訪問し、演説を依頼した一高の弁論部員河上丈太郎は、第二次世界大戦を経た40年後、当時を回想して「蘆花事件」⁽¹¹⁾を書く。河上によれば、演説を快諾した蘆花に演題を問うと、「不平を吐露するには一高はよいところだからな」と言い、火鉢の灰に火箸で「謀叛論」の三文字を書いたという。また同じ弁論部員だった河合栄治郎は、日中戦争前夜に「近頃の感想」⁽¹²⁾という文章に、蘆花の演説を回想し、

(11) 河上丈太郎「蘆花事件」『文藝春秋』1951年10月1日

(12) 河合栄治郎「近頃の感想」『日本評論』1937年1月1日

「それは驚くべき雄弁であつた。所謂雄弁家の弁ではないが、あれが本当の雄弁と云ふのであらう。私共は息つく間もない位にひきずりこまれて、唯感心してしまつた」と書いている。むろん時代を考慮してその内容にはふれていない。

言論の自由を得た戦後は、田中耕太郎や森戸辰男も断片的ながら「謀叛論」にふれている。一高生ではなく東京高商の学生だった浅原丈平は、もぐりで蘆花演説を聴き、戦後「謀叛論」の回想⁽¹³⁾や「謀叛論」聴講の思出一節⁽¹⁴⁾を書く。

一方、井川恭・芥川龍之介らフレッシュマンは、1910（明治43）年9月、入学なので、蘆花の演説は、入学5か月後に聴いたことになる。弁論部主催のこの催しは、新入生歓迎の学校行事に位置づけられていた。が、出席は強制などではなく、自由参加であった。そこで参加した者も、不参加の者もいたわけである。中野好夫の『蘆花徳富健次郎 第三部』⁽¹⁵⁾は、巻頭に「謀叛論」の章を置き、詳しく論じた労作ながら、現在の時点では修正を求めたいところがいくつもある。中野氏は蘆花の演説にふれた後、「この当時在校下級生には菊池寛・芥川龍之介・山本有三・久米正雄等々もいたはずだが、神崎（筆者注、神崎清）によると、この演説のことは、ほとんど誰も書きのこしていぬそうである」云々と書く。が、これは大きな間違いとしてよい。数多くの一高フレッシュマン、——一年生は、この講演会に出席し、その記録を残していたのだから。

わたしが蘆花の「謀叛論」演説に注目したのは、実は芥川龍之介を中心とする人々の研究を通してのことであった。松岡譲の「蘆花の演説」⁽¹⁶⁾という文章を見出したのは、もうかなり前の1960年代の後半のことだが、わたしはそこに当時の一高生が「謀叛論」演説から受けた衝撃の一典型を見たのである。松岡譲は「その時の蘆花の姿と声とはまだ昨日のやうに覚えて居る。余程感銘をうけたものと見える」と言い、弁論部長畔柳都太郎の紹介で壇上に姿を見せた蘆花の壮漢のような人物を見上げたことにはじまり、その熱っぽい語り口を伝えている。そのほか、蘆花の演説を聴き、それを文章に残した当時の一高一年生には、菊池寛・久米正雄らがおり、活字にはしなかったが、日記に蘆花演説にふれた記録を残した一年生には、成瀬正一・森田浩一、そして井川恭らがいたのを確認した。学問・研究は、まさに日進月歩なのである。特に井川恭の1911年2月1日の日記（「向陵記」）の記述は、重要な発見であった。そこには蘆花の「謀叛論」演説が、しかと書き留められていたのだ。

恒藤恭の評伝を書くために、わたしは恒藤家の次男（恭の長男信一は夭折）であられる恒藤武二氏を京都市北区の紫竹下高才町の自宅に訪ねた。武二氏は、父と同じ法哲学を専門とし、長らく同志社大学にお勤めであった。当時名譽教授となられた故恒藤武二氏からわたしは随分多くのことを教えられた。恒藤恭研究の先達、先導者は、大阪市立大学名譽教授の故山崎時彦

(13) 浅原丈平「謀叛論」の回想』『武蔵野ペン』創刊号、1958年6月1日

(14) 浅原丈平「謀叛論」聴講の思出一節』講談社版『現代日本文学全集17 徳富蘆花集』1966年1月19日

(15) 中野好夫『蘆花徳富健次郎 第三部』筑摩書房、1974年9月18日

(16) 松岡譲『蘆花の演説』『政界往来』1954年1月1日

氏である。これも余談になるが、氏はある時、「あなたはいい。武二先生はお若い頃は、非常に厳格で、わたしなど、かしこまってご意見をうかがったものだ」と言われたことがある。武二氏はプライバシーにことのほか敏感であったことは、わたしも取材を通して感じていた。そうした点からも父の日記の存在など、隠しておられたようである。わたしが武二氏を訪問したのは、氏の晩年であり、かつては秋霜烈日のごとき武二氏も、温厚なご老人となられ、わたしの訪問を、いつも楽しげに待っていて下さるというふうだった。

恒藤恭は『旧友芥川龍之介』に、昔の日記を盛んに利用している。『旧友芥川龍之介』は、克明な日記の存在があつてはじめて若き日の芥川との交流や芥川家のが、活き活きと回想できたのである。そこでわたしは、ある時、「お父上の恒藤恭先生は、中学校時代から日記をお書きになっていたようですが、現物はまだあるのでしょうか」とさりげなく問うてみた。すると武二氏は重い口を開き、「それはこの家にはない、弟のところにある」とぼつり言われたのであった。弟と言いうのは、三男で京都大学の理学部に長年お勤めになった、恒藤敏彦のことである。わたしは当時京都府宇治市にお住まいの敏彦先生に電話で用件と訪問したいことを伝え、諒解を得て、出かけることになる。宇治の閑静な住宅街にある敏彦氏の家は、二階建ての立派な家であった。敏彦氏が、「これが父の日記です」と言い差し出された日記類は、一目見て同時代を語る貴重な証言であることを、わたしは確信した。

恒藤敏彦氏は京大理学部教授を定年後は、龍谷大学理学部の教授になられた方である。が、若き日は文学を志したこともある由で、日記が資料的にも貴重であることをよく理解され、その保存に努めておられたのである。日記ばかりか、井川恭宛ての若き日の100通を越す芥川書簡も敏彦氏が保存されていたのだ。これらは現在すべて大阪市立大学の恒藤記念室に寄託されている。井川恭時代の日記は、島根県立第一中学校時代から、療養生活時代のもの、そして一高時代の8冊に及ぶ「向陵記」までが、じつに丁寧に保存してあった。わたしは芥川周辺人物の研究に携わってきた。そして、それらの人々の日記の発掘には、近年しばしば立ち合っている。それがわたしの研究を大幅に進展させたのだ。が、「井川日記」の出現ほど、衝撃的なものはなかった。「向陵記」を含めた「井川日記」の出現は、蘆花の「謀叛論」研究や芥川をはじめとする一高時代の友人の動静を的確に伝える貴重な証言として、また、より広くは、同時代知的青年の精神を伝えるものとして、きわめて貴重な資料なのである。

わたしは恒藤敏彦氏のご好意で、1ヶ月ほどこれら日記類の全てをお借りし、調査に当たった。1995（平成7）年の夏のことである。そして翌年、わたしの勧めもあって新築された大阪市立大学学術情報総合センター内の恒藤記念室に、「井川日記」はすべて寄託されたのである。そのうちの「向陵記」（一高時代の日記）の部分は、広川頴秀氏をはじめとする大阪市立大学大学院日本史学専攻院生の方々の努力で、2003（平成15）年三月に活字化された。『向陵記——恒藤恭 一高時代の日記——』⁽¹⁷⁾である。「向陵記」をはじめとする「井川日記」は、叙述の客觀性と觀察力のすぐれた記録によって、一個人の日記を超え、近代日本をとらえたすぐれた

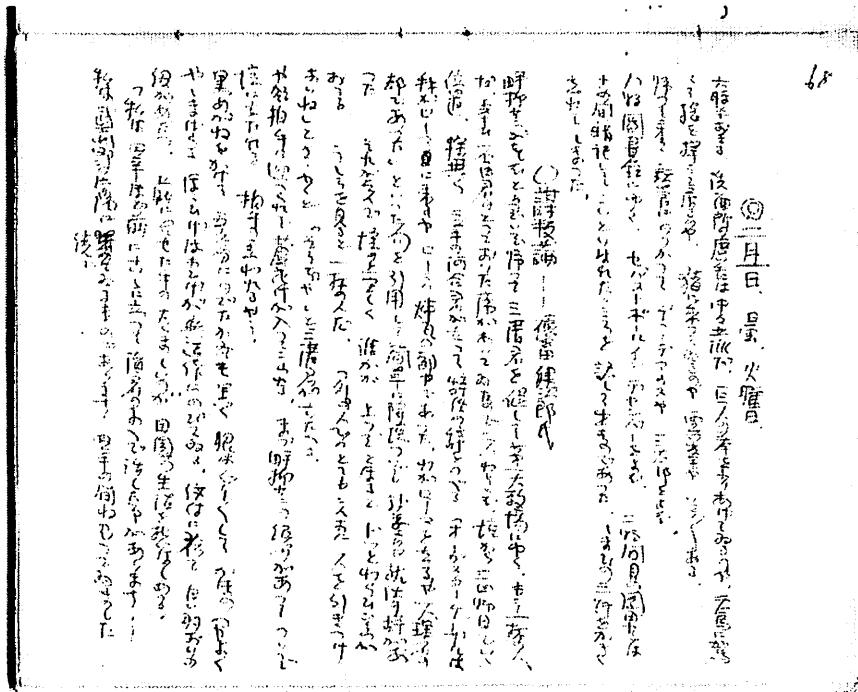
(17) 大阪市立大学大学史資料室編『向陵記—恒藤恭一高時代の日記—』大阪市立大学、2003年3月31日

ドキュメントとなったのだ。それだけに中学時代の日記を含めて、「井川日記」の全冊が活字化されることを、わたしは強く願っている。

さて、これからが本論の中心課題となる。わたしは「向陵記」に相当する一高一年生時代の「井川日記」を読んでいて、1911年2月1日の記述を見てハッとした。それはわたしにとって、筆舌に尽し難い感動が伴う事件であった。井川恭は、当日行われた一高第一大教場での蘆花「謀叛論」演説と、二日後の全学集会での新渡戸稻造校長の蘆花演説にかかる訓話を、感想抜きに誠実にしっかりと書き留めていたのである（写真1）。2月1日のところには、「謀叛論……徳富健次郎氏」と見出しをつけ、大学ノート3枚半もの分量をとった記述がある。これは演説草稿との比較や「謀叛論」が当時の一高生に与えた影響を考えるのに役立つばかりか、大逆事件そのものの重要文献となるものだ。

大逆事件100年を迎える歴史学者や社会学者からも注目を浴びてよい記述がそこにあった。演説草稿と比べて、ずっと踏み込んだ表現を蘆花が口にしたことがわかる箇所もある。例えば「幸徳君ハ死んではゐない。生きてゐるのである。武藏野の片隅にひるねをむさぼる者をこゝに立たしめたではありませんか」（写真1-（3））とか、「圧制はだめである。自由をうばふのハ生命をうばふのである……」（写真1-（4））などである。

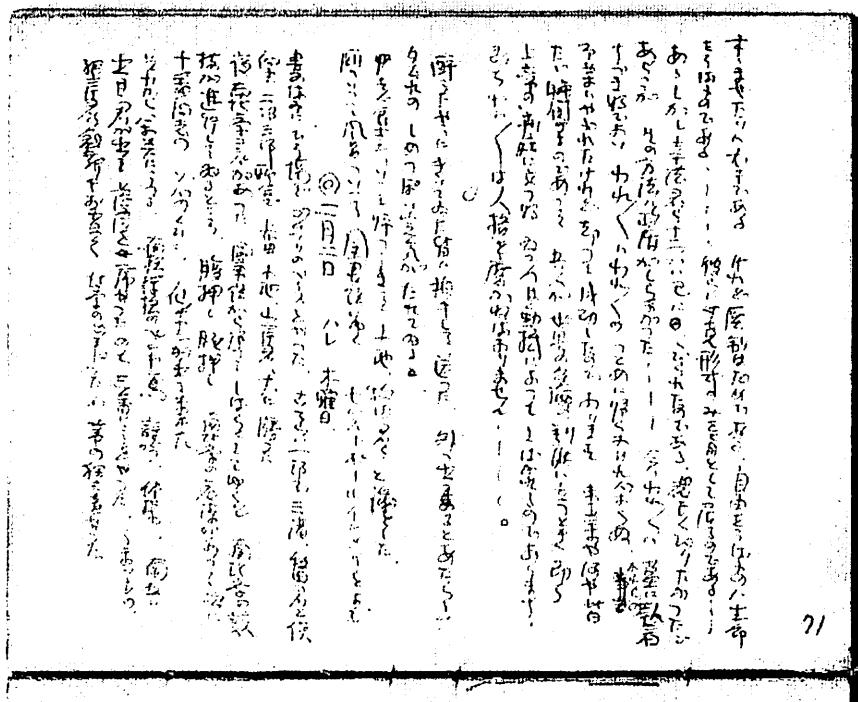
（写真1）「謀叛論」演説を記録した井川恭の日記「向陵記」1911年2月1日（部分）



(1) 68 ページ

(2) 69 ページ

(3) 70 ページ



(4) 71 ページ

5. 「謀叛論」の波紋

わたしは蘆花の「謀叛論」演説会場に、井川恭の親友となった芥川龍之介もいたのではないか、そして蘆花の叫びに強い共感を抱いたのではないかの考えを永年懐いていた。ただ、芥川に蘆花の演説を聴いたという文献が見出せないため、わたしは芥川の周辺を調べ上げ、松岡譲・菊池寛・久米正雄・成瀬正一・西川英次郎・矢内原忠雄、石田幹之助、そして井川恭ら、1910（明治43）年一高入学組が、みな蘆花演説を聴いているのを確認するに至った。それによって、松岡譲が「学内も当座は賛成不賛成二派に分かれて至るところで議論の花が咲いた」⁽¹⁸⁾という状況の中で、芥川ひとりがぽつんと孤立していたと考える方が無理との推論を持つに至ったのである。

わたしは蘆花の「謀叛論」演説は、井川恭と芥川龍之介とをより強く結びつけたとの仮説を何時か立てるようになった。井川の「向陵記」を見ると、芥川龍之介の名がはじめて登場するのは、1910（明治43）年の11月29日、火曜日である。その20日ほど前の11月10日、木曜日の記事には、「昨日午後、幸徳秋水、管野すが以下二十五名の社会主義者が、皇室に対する陰謀によって審理中の件が、いよいよ大審院の特別公判にうつさるゝ事になつたとの号外が出

(18) 注16と同じ

たが、けさは新聞の三面ハその為に賑うて居る。室でも教場でも噂が盛んだつた」とある。寮でも教室でも大逆事件のことで「噂」することが、しきりであったことがわかる。

まだ、入寮していなかった芥川は、主として教室で大逆事件にかかわる井川をはじめとする級友の意見を聴いたことだろう。また、翌年2月1日の蘆花の演説を、たとえ直接聴かなくとも、全学集会や『萬朝報』の報道などから事件について知り、それへの的確な考えを教室で述べる井川恭に、次第に惹かれていたのではないかと思うのである。同時代青年共通課題としての謀叛の精神は、当時の一高生に脈打っていた。井川恭・松岡譲・成瀬正一らは、みなその精神に則った考え方を日記や回想記に書き残した。謀叛の精神は芥川龍之介とて例外ではなく保持したとしたい。それは共に接した蘆花の「謀叛論」演説を通し、確かなものとなって彼らの精神にとどまったというのが、わたしの見解である。

井川恭は京都大学を終えると、引き続き大学院に籍を置いて国際法や法哲学研究に没頭する。その頃から彼は、新カント派の哲学思想に惹かれながら、他方それと対照的な立場をとるマルクス主義の哲学思想にも興味を示す。結婚し、恒藤姓となって同志社大学に職を得た直後には、河上肇から『共産党宣言』の講義を受け、『資本論』にも目を通していった。そういう彼に芥川龍之介はしばしば社会主義にかかわる知識の教えを請うている。それは一高時代の井川恭の的確な社会批判を、知っていたからである。恒藤恭は「芥川龍之介のことなど」という回想記(『旧友芥川龍之介』収録)に、1918(大正7)年のころ、「社会思想について知りたいから、手ごろの本を貸して欲しい」との芥川の依頼で幾冊か貸したと書きつづっている。芥川は恒藤恭によって社会主義への理解を深めることになるのである。「謀叛論」演説に的確な反応を示した恒藤恭は、芥川の社会主義理解にも強い影響を与えていたのだ。

1921(大正10)年、芥川龍之介は大阪毎日新聞社の特派員として中国各地を訪れ、中国民衆の日本への反感を察知する。また、章炳麟や李人傑や胡適ら目覚めた中国の知識人と意見を交わす中で、芥川の世界観は確実に変わって行った。賢い芥川は、一高時代の蘆花の「謀叛論」演説を吸収し、その謀叛の精神を以後、「羅生門」「偷盜」「忠義」「地獄変」などに示していたが、中国旅行を経て、謀叛の精神に立つ社会主義という概念を、現実のものとして考えるようになる。

帰国後彼は、「將軍」(『改造』1922・1)という小説を書いている。それは特派員としての中国視察の成果の一つであった。戦場において異常性に駆られた將軍や部下の騎兵の冷血な行為、彼らの「殺戮を喜ぶ氣色」を描き出したものだ。初期プロレタリア文学として位置づけてもおかしくないとわたしは考えている。「將軍」に関しては、別稿「『將軍』論——反戦小説の視点の導入——」⁽¹⁹⁾を参照してほしい。また、その後書かれる「桃太郎」(『サンデー毎日』1924・7・1)は、帝国主義日本の戯画となっている。これは上海で会った章炳麟のことば、「予の最も嫌惡する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である」が意識されている。芥川は勃興するプロレタリア文学に刺激されて、この作品を書いたが、これまた、初期プロレタリア小説とみなしてもおかしくないものである。

(19) 関口安義「『將軍』—反戦小説の視点の導入」『国文学 解釈と鑑賞』2007年9月1日

蘆花の謀叛論演説に導かれ、開花した芥川の社会主義思想は、関東大震災の際の自警団批判にもうかがえる。彼は震災後、町会の自警団に加わっていた。これまで、あの知的作家の芥川がという先入観がわざわいし、そんなことはないと端から考えられるのが一般的であった。そして、芥川と関東大震災に関して論じられることが、余りに少なかった。が、事実は、芥川も棍棒や竹槍で武装した自警団員の一人だったのである。もっとも彼は町会の人々の手前もあって、病身の身を押して加わっていたのだ。彼には「或自警団員の言葉」(『文藝春秋』1923・11) という文章すらある。

これは生前刊行の芥川のどの本にも入らなかっただけで、見逃されてきた文献といってよい。この文章は、自警団体験記という感じなのだが、見るべきものはしっかりと見て発言している。ここで彼は大震災とそれに続く大火災の中で、人々は互いに憐れまねばならないのに、「殺戮を喜ぶ」とは何ごとか、と言うのである。彼は朝鮮人への迫害現場に遭遇し、自警団の野蛮な行為を見ていたのであろう。しかも「殺戮を喜ぶ」人々が、善良な市民であるのを見、心を痛めている。こんなことがあってよいわけではないとの思いの溢れた文章だ。それは「將軍」で、N 將軍がふだんは善良な人なのに、戦場では冷血な行為に走り、「殺戮を喜ぶ氣色」を示すのを描いたことに通じる。

ところで、法科に転じた恒藤恭は、卒業後同志社大学教授を経て、やがて母校京都帝国大学法学部の教授となる。同志社大学時代には、土田杏村の自由大学に協力している。自由大学とは第一次世界大戦後の、いわゆる大正デモクラシー運動の中から生まれた地域住民の自己教育運動である。杏村はそれを「労働しつゝ学ぶ」学校で、「終生的なもの」という。今日のことばでいうなら生涯学習ということになろうか。杏村は長野県上田市で、信濃自由大学を1921(大正10)年11月に開校し、恒藤恭を講師として迎えたのである。土田杏村は恒藤恭の仕事を高く買っていた。二人とも理想主義に立つ新カント派の影響を受け、また、マルクス主義からも学ぼうとしていた。杏村が自身の理想の自由大学を構想した時、恒藤恭が第一に講師として浮かんだのは、ごく自然なことだった。第一回の自由大学で、恒藤は法哲学を主題に講義をした。この間彼は、前述のように新カント派のラスクやシュタムラーなどの新カント派の論文の翻訳や紹介、さらには研究を行っている。新理想主義の哲学である新カント派の人々の考えは、恒藤恭、そして同じ一高の同級生藤岡蔵六の紹介⁽²⁰⁾を通し、芥川龍之介にも影響を与えていることが近年の研究が明らかにし始めたところである。

信州はもともと教育の盛んな県であり、各地教育界の主催する上からの季節大学などが同じ頃からはじまっていた。杏村はそれに対し、下から盛り上がる自己教育を考えたのである。隣りの山梨県でも、自由大学運動に刺激され、1923(大正12)年8月には、北巨摩郡教育会主催の第2回夏季大学が、秋田村(現、北杜市)の清光寺で開かれ、芥川龍之介が講師として招かれていることも想起される。二人ともこうした運動には協力的であった。自由大学運動と恒藤恭のかかわりをより詳しく知りたい方は、わたしの『恒藤恭とその時代』⁽²¹⁾を参照してほしい。

(20) 藤岡蔵六『コーエン純粹認識の論理学』岩波書店、1921年9月10日

(21) 関口安義『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、2002年5月30日

6. 恒藤・芥川と社会主义

さて、恒藤恭は1924（大正13）年3月から1926（大正15）年9月までヨーロッパ各国での在外研究を経験し、帰国する。ヨーロッパの大学を見、その制度にも触れた恒藤恭は、新たな研究課題をかかえていた。法理学（法哲学）の研究である。当初経済学部の所属だった恒藤恭が法学部に異動するのは、1928（昭和3）年からのことであり、以後、橋本文雄・加古祐二郎・淵定などの俊才を育てることになる。ヨーロッパでの研修を終えて帰国した翌年の1927（昭和2）年7月24日未明、芥川龍之介は自死する。その夜、悲報に接した恒藤恭は、26日の夜8時過ぎの列車で上京、翌日の葬儀に長崎太郎と出席した。

芥川の死は、昭和初頭の文学史的事件にとどまらず、昭和動乱の思想的底流を象徴する事件であった。遺書の一つとも見做される「或旧友へ送る手記」は、〈僕〉という語り手の自殺の立場を語ったものである。中に次のような文面がある。

君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、^{あるいは}或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであらう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してゐるだけである。自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は^{たゞ}唯ぼんやりとした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安である。

芥川龍之介の死を語る場合に、しばしば引用される「唯ぼんやりとした不安」の一語は、右に引用した文章のことばを出所とする。二度繰り返されるこのことばの二度目には、「僕の将来に対する」という修飾のことばがつく。将来に対するぼんやりとした不安には、いくつかのことが指摘されてきた。詳しくは、わたしの『芥川龍之介とその時代』⁽²²⁾を参照してほしいが、彼が考えた不安の一つに、新時代のおとずれ、時代の新たなるねりがあったことをあげたい。彼は新時代に自身が適合できるかに悩んでいたのである。それは当時日本の知識人の多くが抱えた問題でもあった。

数年前、激動期の中国をめぐり、芥川は中国人の日本への反感を強く意識した。また、中国で章炳麟や李人傑や胡適ら自覚した人々と意見を交わす中で、芥川の世界観は確実に変化していた。中国への旅は、芥川に中国知識人の悩みを知らせ、彼の社会主义理解を進展させたのであった。もともと芥川は社会主义を、早く中学時代に実家の搾乳業耕牧舎に勤めていた久板卯之助から学んでいたと後年自ら「追憶」⁽²³⁾で述べることになる。「追憶」では久板を回想し、「彼は僕の実家にある牛乳配達の一人だつた。僕はこのヒサイダさんに社会主义の信条を教へて貰

(22) 関口安義『芥川龍之介とその時代』筑摩書房 1999年3月20日

(23) 芥川龍之介「追憶」「文藝春秋」1926年4月1日～27年2月1日

つた」とある。また、一高時には徳富蘆花の「謀叛論」演説に接し、以後井川恭、のちの恒藤恭から社会主義のさまざまなことを学ぶ。

芥川が大学を卒業して2年たった春、未だ大学院に在籍して研究生活を送っていた恒藤恭を訪ねた時、芥川は恒藤から社会思想について知りたいと言い、恒藤が幾冊か貸したということは、先にふれたが、その中にはエルツバッハの*Anarchismus*の英訳本があったというから、大変なものだ。また、社会主義に関して、熱心に論じ合ったという。芥川は同時代知識人の中にあっても、社会主義をよく理解した一人としてよいのである。そのことは彼の周辺にいた仲間が指摘していることである。

例えば菊池寛は「(芥川は)ショウを読破してショウに傾倒し、ショウがいかなる社会主義者よりもマルクスを理解してゐたことなどを感心してゐたから、社会科学の方面についての読書などもいゝ加減なプロ文学者などよりも、もつと深いところまで進んでゐたやうに思う」⁽²⁴⁾と言ふ。また、萩原朔太郎は、「例へば彼は、我が國今日の文壇中で、おそらくは何人よりも熱心に、しかも最も早く社会主義を研究し、マルクス理論に通曉した人であつた。そして既成文壇の大家中で、所謂プロレタリア文学に理解と同情を有したところの、眞の唯一の人であつた」⁽²⁵⁾と書く。すでに小著『芥川龍之介とその時代』⁽²⁶⁾で指摘したことであるが、宇野浩二はトロッキーを読んでいた芥川に言及している⁽²⁷⁾。宇野の発言を踏まえて志田昇は、「芥川の晩年の文章のなかには明らかにトロッキーを讀んだ形跡がうかがわれる」とし、「文芸的な、余りに文芸的な」(『改造』1927・4～6、8)への『文学と革命』の影響を説く。こうした芥川を別の面で証明するのは、その旧蔵図書である。早くわたしは芥川の所蔵図書に社会主義の文献が多いのに気づいていた。それはわたし가 30 年ほど前に『新潮日本文学アルバム芥川龍之介』⁽²⁸⁾を編集した際に、当時岩森亀一氏が所蔵していた芥川旧蔵書（現在山梨県立文学館蔵）を点検したことによる。そこにはウィルヘルム・リープクネヒトの *KARL MARX Biographical Memoirs* など、ロシア革命に関する洋書がかなりあった。

芥川は「社会主義は、理非曲直の問題ではない。単に一つの必然である。僕はこの必然を必然と感じないものには、^{あたか}怡も火渡りの行者を見るが如き、驚嘆の情を禁じ得ない。あの過激思想取締法案とか云ふものの如きは、正にこの好例の一つである」(『澄江堂雑記』『新潮』1922・4)とまで断言していたことも想起される。先の「將軍」は、彼の時代との格闘の中から生まれた反戦小説であったのだ。ここに登場するN將軍は、冷酷な日本帝国の軍人である。このテクストは〈陛下の御為に〉の名目で死ななければならない下級兵卒の悩みや、捕虜に対する非人道的扱いなどをあからさまに描いた点で、高く評価される。

一方で彼は、また社会主義や共産主義の時代が来ても、そこにも〈婆娑苦〉が存在すること

(24) 菊池寛「芥川の事ども」『文藝春秋』1927年9月1日

(25) 萩原朔太郎「芥川龍之介の追憶」『文藝春秋』1928年10月1日

(26) 注22に同じ

(27) 宇野浩二『芥川龍之介[普及版]』文藝春秋新社、1953年10月5日

(28) 関口安義編『新潮日本文学アルバム芥川龍之介』1983年10月20日

とを見抜いていた。芥川はいかに理想とされる社会体制が実現しても、生きることの悩み、矛盾や撞着は避け得ないという、人間の営みにまつわる〈原罪〉を意識した作家であった。冷戦後の世界の歩みは、芥川のこうした考えの誤りでなかったことを告げるかのようである。それは常に生きるとはいかなることかを追究した彼の宿命であった。それが「唯ほんやりとした不安」ということばに集約されるのである。それは芥川一人の不安ではなかった。同時代知識人共有の不安であった。だからこそ、その死は大きな反響をもたらしたのである。

他方、恒藤恭の時代の波に大きく抵抗する歩みは、芥川龍之介の死と共にはじまる。河上肇事件、それに続く京大事件への対処方法は、恒藤恭がいかに時代に敏感であったかを示す。それは一高時代蘆花の「謀叛論」演説を聴き、その夜、直ちにその演説内容を日記に克明に記（しる）すという行為の延長線上にあったものとしたい。彼もまた芥川的〈不安〉に取り囲まれていた。が、彼はあらゆる可能性を求め、また疑い、考え方抜くという抜群の論理性を持っていた。その資質、——知性の闇いを貫き通すことにおいては、芥川の比ではなかった。彼が京大事件に際して書いた「死して生きる途」（『改造』1933・7）は、理想主義の新カント派の考えに西田幾多郎から示唆されたものが、脈打っていた。その淵源は、一高時代に聴いた蘆花の「謀叛論」の一節、「幸徳君ハ死んではゐない。生きてゐるのである」にある。

後年立命館大学総長となった天野和夫は、「死して生きる途」を取り上げ、「この文章の中に、わが国で最後のストイックな学者、最も学究らしい学者と言われる先生の厳しい生活信条が、余すところなく伝えられている」⁽²⁹⁾と評している。「死して生きる」とは、実に奥深いことばである。それははっきりとした右傾化時代の中での抵抗の方法であり、芥川の「ほんやりとした不安」を止揚するものであった。

反動の時代の波に抵抗した恒藤恭の闇いは、以後生涯のものとなる。戦後、大阪市立大学の初代学長として、理想の学園造りに励み、一方で大内兵衛らと平和問題談話会を結成し、全面講和・軍事基地反対を唱え、さらに憲法擁護、世界平和への提言など、時代に敏感に反応する社会意識・歴史認識は、生涯衰えることがなかった。その淵源は、一高時代に接した蘆花の「謀叛論」演説にあったとしたい。急ぎ足になったが、蘆花の「謀叛論」演説は、恒藤恭と芥川龍之介という二つの知性に、生涯大きな影響を与えたということを、最後に今一度確認し、稿を閉じることとする。

（せきぐち やすよし・文芸評論家、都留文科大学名誉教授）

(29) 天野和夫「恒藤恭先生のご逝去を悼む」「法学セミナー」1968年1月1日